

映画文化協会所蔵の歌舞伎台本（一）

著者	児玉 竜一
雑誌名	芸能の科学
号	30
ページ	199-230
発行年	2003-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00003078/



映画文化協会所蔵の歌舞伎台本（一）

児玉竜一

- 一 映画文化協会と台本
- 二 映画文化協会所蔵台本表題目録（未定稿）
- 三 資料紹介 『おもちゃ店』
- 四 資料紹介 『劇的パレー 嫉妬』
- 五 資料紹介 『五代目市川三升襲名披露口上』
- 六 資料紹介 『七代目尾上栄三郎襲名披露口上』

一、映画文化協会と台本

歌舞伎台本の所在調査については、『歌舞伎台帳所在目録及び書誌調査』（昭和五十六年・歌舞伎台帳研究会）が、現在まで最も有用な目録として活用されている。

『国書総目録』に基づく同所在目録は、一覽性において極めてすぐれており、今後とも有用に活用されてゆくことは間違いないが、同書刊行ののちに、歌舞伎台本を多く所蔵する機関で、あらたに目録等を刊行した機関もある。しかし、それら一連の歌舞伎台本および関連する目録、あるいは所在目録等は、すべて、近世のものに限られており、近代における歌舞伎台本の所在は、ほとんど知られないといっても過言ではない。わずかに早稲田大学演劇博物館が刊行した図録『没後百年 河竹黙阿弥 人と作品』（平成五年）において、河竹黙阿弥関係の台本が目録化されたほか、阪急学園池田文庫が刊行している台本目録が、結果として近代の台本を含む、ということになっている。

近世を以て歌舞伎の歴史が終焉したのではないことは、言うまでもない。舞台芸術としての価値を見定めるための歴史としては、より現在に近い年代が重要となってくることもまた、言うまでもない。

東京文化財研究所芸能部では、如上のような事情に鑑み、近代歌舞伎台本の研究に寄与すべく、微力ながら調査に着手しており、その成果の一端として映画文化協会に所蔵される台本について紹介する。なお本稿では、近世期から近代期に至る歌舞伎のみならず、後続ジャンルにわたって論及するため、「台帳」「台本」の呼称をすべて「台本」に統一する。

近世の歌舞伎台本が、その性格上、大きく二系統に分かれることは夙に説かれている。劇壇系統の台本と、貸本屋系統の台本がそれぞれであり、劇壇系統の台本は、劇壇内部に秘蔵されているものであるため、上演までの過程を辿る点

ではまことに貴重であるが、残存数もまた貸本屋系統のものに比べると少ないことも知られている。

近代の歌舞伎台本についてもほぼ同様のことが考えられ、興行会社のもとに台本は残る、という原則を確認できるのではないかと思う。即ち、近代における代表的な興行会社であるところの、松竹と東宝の手に台本は残っているのである。

松竹は、東京の松竹大谷図書館、関西における松竹関西演劇分室（関西松竹）に、明治以来の台本および、それ以前からの台本が残っている。

東宝では、関西では阪急学園池田文庫に、歌舞伎台本が数多く收藏されている。ただしこれは、東宝が歌舞伎興行に携わったことは関係なく集まったもので、東宝の近代歌舞伎史における足跡を資料の形で留めるのは、東京の日比谷シャンテ一階の、財団法人映画文化協会であるといっている。

財団法人映画文化協会は、昭和二十七年に設立され東宝傘下の各社をはじめとする会費等によって運営されている。菊田一夫賞や藤本賞などの映画・演劇賞に協賛するほか、東宝および広く演劇関連の資料類を保管している。同協会の収蔵庫に保管されている資料類は、参考資料としての演劇書や演劇雑誌や写真類にはじまり、東宝が制作に関連した映画・演劇の原資料におよぶ。すなわち、映画シナリオから菊田一夫関連の演劇関係資料、台本や原稿類まで、近代芸能関係の一大資料群である。

この中に、歌舞伎の台本も含まれている。それは、東宝株式会社が昭和十二年から経営に参画した帝国劇場関連の資料として残っているものと思われる。

帝国劇場は、明治四十四年に開場し、帝国劇場株式会社によって運営がなされてきた。大正十二年九月一日の関東大震災によって類焼するが、文芸部の資料等の行方については知られていない。しかし、映画文化協会の保存資料の現況をみるに、延焼を免れた震災前の資料を含めて、松竹が経営参加した時期を経て、東宝の手に渡って戦災を逃れ、

今日に至っていると考えられるのである。

現存の台本類は、形態によると大きく七つに分けられるようである。

- 一、毛筆による写本
- 二、謄写版による台本
- 三、カーボン謄写による台本
- 四、雑誌記事
- 五、単行本
- 六、自筆原稿（毛筆・ペンによる）
- 七、音曲稽古本

これらには多く「帝国劇場図書」の印が捺されているが、その文芸部が参考資料として保管していたものも含まれ、すべてが帝国劇場での上演資料というわけではない。「有楽座」の印記を有する台本もある。一に属する写本は、近世期のものも多く含まれ、「竹柴其水」の蔵印等が散見される。近世期の写本については、かつて古井戸秀夫氏によって整理がなされているが、とりわけ貴重な写本に関しては、その後、別置保管がなされているとこのことで、本年度はそれらの閲覧にまでは至っていない。

四は、雑誌に掲載された戯曲を、その部分だけ抜き取って保存しているもの。五は、単行本として刊行された戯曲である。一から六のすべてには、警視庁保安課の台本検閲のための上げ本として提出され、「検閲済」の印を捺されて返却された検閲本を含んでいる。四のとき雑誌記事に、仮の表紙をつけて上げ本として、その見返しに検閲印を受けているものもある。五のような単行本でも、当該の戯曲以外の部分に封をした上で、仮表紙を別につけて検閲印を受ける場合がある。岸田国士作『隣の花』（昭和三年五月帝国劇場上演）のように、雑誌（初出誌未見）掲載の記

事の幕切れ部分を貼り紙で加筆訂正して、検閲用の上げ本とした例もある。

七は、長唄や常磐津など音曲の薄物の稽古本である。これは、台本とは言い難いが、清元の『文屋』のように、清元の稽古本に台詞を書き込んだ貼り紙をして、検閲用の上げ本とした例も存在するため、今は除くことをせず左記の表題一覧にも併せて記すこととした。

二、映画文化協会所蔵台本表題一覧（未定稿）

以下では、まず現存する台本の表題を紹介する。個々の冊に体系的な整理番号を付されていないため、配列は基本的に、映画文化協会の倉庫に配架されている順による。台本を収めた封筒に、先人の考証（映画文化協会におられた故・有川太郎氏によるものと思われる）がなされているものがあり、それを参考として『帝劇の五十年』（昭和四十年九月・東宝株式会社）で裏付けしつつ、作者や訳者等を付記した。一つの表題に、複数系統の台本が保存されている例も多く、全貌を紹介するには時日を要するため、まず表題によって資料の概観を紹介しておくことにも意味があるかと思う。個々の細目や種別については、次年度以降に順次触れてゆく予定であるが、先述の通り、別置本等の未見資料もあり、「未定稿」とする由縁である。

【ア】

吾孀鑑紅筆草紙（右田寅彦作）	姉と妹（佐藤紅緑作）	東明節新曲 海女
悪魔の弟子（舞台協会翻訳）	安宅丸（右田寅彦作）	社会劇 悪人（佐藤紅緑作）
吾妻五人男（平山晋吉作）	愛と恨（江見水蔭作）	芦屋道満大内鑑
	上るり 雨宿り	浅草靈験記

- 朝日御前花子譚
揚羽蝶岡山実記
雨夜伽累譚
当の大蔵譚
明烏春泡雪
明烏雪浦里
通傾城花大矢数
東花腕達引
- 【イ】
妹背山婦女庭訓
池写月面影
岩倉宗玄恋慕琴
茨木屋幸斎（池田大伍作）
史劇 石田三成（八木稚櫻作）
いろは双紙（右田寅彦作）
石橋山（岡本綺堂脚色）
医師の母（松居松葉作）
大江戸歌舞伎 市川団十郎（右田寅彦作）
- 笑劇 犬（佐藤紅緑改訳）
一を十二倍すると、十二を一倍すると（久保田万太郎作）
医王子観音由来（松居松葉作）
軍神（松居松葉訳）
粹な捌き（田口掬汀作）
田舎源氏露東雲
妹背山婦女庭訓
妹背山道行
いろは綴女節用
- 【ウ】
梅田心中（額田六福作）
腕環（二宮行雄抄訳）
海の山（本山荻舟・町田博三作）
唱歌舞踊 海の山（久米秀治作）
新楽劇 浦島（坪内逍遙作）
梅幸十種 姑穫鳥（右田寅彦作）
運命（鈴木善太郎作）
草津 姥ヶ餅
- 怨恨の面（平山晋吉作）
上野凱旋祝
- 【エ】
喜劇 X（松居松葉作）
江島生島（右田寅彦作）
飯の梅（岡本綺堂作）
絵巻きの蠹み（長谷川時雨作）
英雄と美人（松居松葉作）
嬰兒殺し（山本有三作）
絵師実は間者（江見水蔭作）
衛士の焚火
絵本太功記
- 【オ】
お夏狂乱（坪内逍遙作）
大江山酒吞童子（宇野四郎作）
恩讐追分節（伊藤松雄作）
喜劇 おまん源五兵衛（松居松翁作）
喜劇 女主人（井出蕉雨作）

- 女殺油地獄（河竹繁俊脚色）
 女同志（二宮行雄抄訳）
 老松若松（松居松翁作）
 女大将（八木稚櫻作）
 応拳と芦雪（松居松翁作）
 お艶殺し（邦枝完二脚色）
 尾形光琳（松居松葉作）
 黄金五枚（右田寅彦脚色）
 おさだの仇討（岡本綺堂作）
 喜劇 親の帽子（村瀬月宿作）
 お江戸日本橋（右田寅彦作）
 お富と与三郎
 女忠臣蔵（右田寅彦作）
 おもちや店（市川猿之助案）
 童話劇 玩具の裁判
 喜劇 小野小町（菊池寛作）
 女郎花塚（右田寅彦作）
 温室の前（岸田国士作）
 浄瑠璃 大津絵
- 大杯鰯酒戦強者
 大汐噂聞書
 近江源氏先陣館
 大江山土蜘蛛談
 女将門七人化粧
 織合襦袢錦
 婦女護国太平記
 稚祐天成田利剣
 滑稽俄安宅新関
 御家模様浮名笄
 恩愛贖関守
 男作五雁金
- 【力】**
 片恋（井出蕉雨作）
 苺萱堂（右田寅彦作）
 菅公
 影（雪の夜）
 舞踊劇 通小町（山崎紫紅作）
 加藤左衛門（山崎紫紅作）
- 敵討合邦辻（林和脚色）
 かな岡（右田寅彦作）
 喜劇 返り討（井出蕉雨作）
 悲劇 片瀬の子（江見水蔭作）
 バレー 輝く世界（大島勝吾作）
 鎌倉武士（右田寅彦作）
 邯鄲（岡本綺堂作）
 釜淵双級巴
 加賀見山旧錦絵
 桂川連理柵
 勸進帳
 敵討襦袢錦
 敵討稚物語
 歌舞伎若衆
 梶原平三紅梅鞆
 川中島勝利山本
 仮名手本忠臣蔵
 鹿子帯朝日新染
- 【キ】**

- 勤王遺聞（河竹新水作）
清盛行状記（津村京村作）
狐大名（多田不二作）
喜劇 キゲキ（井出蕉雨作）
喜劇 緊縮（松居松翁作）
犠牲（松居松翁作）
金吾秀秋（右田寅彦作）
祇王（山崎紫紅作）
義理物語（岡本綺堂脚色）
紀国文左大尽舞（右田寅彦作）
菊の寿（池村あす子作）
義士銘々伝
鬼一法眼三略巻
勢獅子
狂言の靱猿
京鹿子一対振袖
祇園祭礼信仰記
鬼神於松操祭礼
岸姫松轡鑑
- 近世桜田雪紀聞
木村長門守廻伝
吉備大臣入唐記
公平天狗問答
金竜山枝来姿画
【ク】
くちなは物語（岡本綺堂改作）
沓草鞋滑稽絵合
国訛笈摺
国名産本場飛白
熊坂長範牛若丸
隈取安宅松
廓育貞女鑑
蜘蛛宿直嘶
黒木壳
喜劇 国境（田口掬汀作）
栗山大膳（右田寅彦作）
【ケ】
煙（永井荷風作）
- 月光の下に（田川緑作）
喜劇 結婚反対倶楽部（松居松葉作）
下手人名乗れ（川村花菱作）
玄朴と長英（真山青果作）
玄宗の心持（菊池寛作）
喜劇 芸者美（山岸荷葉作）
傾城鬼ヶ城（池田大伍作）
新舞踊 源氏十二段
契情嫗山姥（大村嘉代子作）
化粧窓離鬼百合
源平布引滝
【コ】
河内山と直待（平山晋吉改訂）
史劇 恋の義仲（江見水蔭作）
歌劇 小町踊（榎茂都陸平作）
胡蝶の舞（松居松葉作）
小三金五郎
恋鼓調懸畏

- 権八小紫
 五月の朝（田中純作）
 高速度剣劇レビユウ（日活金曜会立案）
 館模様岩尾初桜
 館扇曾我訥芝玉
 口上（五代目市川三升襲名披露）
 口上（七代目尾上栄三郎襲名披露）
 五諸軍引哉袖褌
 子供役者の死（額田六福脚色）
 混線（松居松葉作）
 恋の洞（山崎紫紅作）
 童話劇 幸福の扉（伊達豊作）
 古城の鐘（小林愛雄訳）
 碁盤忠信（右田寅彦補作）
 恋の受難（三木葉一郎脚色）
 廣野の花（大坪草二郎作）
 悲劇 恋と仇（佐藤紅緑作）
 連歌花に月文台
- 五右衛門の釜（岡本綺堂作）
 極彩色娘扇
 恋女房染分手綱
 根元草摺引
 御所桜堀川夜討
 恋湊博多諷
 国性爺合戦
 嬭山姥
 恋情二股桜
 御文章石山軍記
 港内噂聞書
 意中謎忠義絵合
 寿靱猿
 越後松沖津白浪
- 【サ】
 殺人術指南（北尾亀男作）
 喜劇 里ッ子（井出蕉雨作）
 桜風呂（右田寅彦作）
 最後の妻（松居松葉作）
- 左間国女王（寺西西山翻訳）
 三右衛門の売出し（林和作）
 西行と静（竹柴晋吉作）
 三軒長屋（平山晋吉脚色）
 佐野治郎左衛門
 薩摩瀉波間月照
 桜狩
 桜紅葉清水清玄
 三世相錦繡文章
 鞘当
 西海硯喩の墨摺
 世三間堂棟由来
 三幅対名歌雨乞
 三勝五卷目
 鶯娘
 嵯峨奥妖猫奇談
 猿廻門途の一颯
 皎渡月笛音
 西海鎮静凱歌盃

【シ】

- 島衛浪此花
真景累ヶ淵
酒中日記
獅子王木遣音頭
しらぬひ譚
神靈矢口渡
新編三枝譚
春色梅開曆
生写賢処女油画
信田妻狐蘭菊花
日月星昼夜織分
集散(北尾亀男作)
振武軍(右田寅彦脚色)
女中難(袖ヶ浦人作)
出世の鼻助(巖谷小波・山岸荷葉作)
春曙夢(円城寺清臣作)
少飛行家(大井冷光作)
- 舌切雀(伊坂梅雪作)
静御前古塚縁起(右田寅彦作)
信玄と謙信(宇野四郎作)
新清水花御所染
松竹梅
質庫魂入替
四季模様白縫譚
縮図
笑劇 小説家(佐藤紅緑作)
女優宣伝業(関口次郎作)
女優募集(松居松葉作)
將軍ハシニバルと少女(園池公功脚色)
七騎落(山崎紫紅作)
白川夜話(鈴木善太郎作)
親友(藤森成吉作)
篠原一座(邦枝完二作)
新鹿の子
七福神
- 劇的パレー 嫉妬
人肉の市(窪田十一訳)
新編入間川(江見水蔭作)
七卿落(右田寅彦作)
清浄女神(松居松葉作)
姉妹(水木京太作)
児童劇七種
能色相図
賤機帯
長唄 石橋
忍夜孝事寄
- 【ス】
浄瑠璃 隅田川の場
雀踊
一中・河東節 隅田川船の内
隅田川統倂
菅原伝授手習鑑
透写筆命毛
スケート(山岸荷葉作)

水車の一夜（鈴木善太郎作）

隅田川花御所染

墨絵富士曙双紙

【七】

喜劇 世間見ず（佐藤紅緑作）

前々太平記（松居松翁作）

関ヶ原（高安月郊作）

摂州合邦辻

【ソ】

悲劇 祖国（田口掬汀訳）

曾我兄弟（森 外改作）

走馬燈（吉井勇作）

曾我模様時合槌

其紛色陶器交易

曾我の対面

其面影牡丹燈籠

増補双級巴

増補伊賀越仇討

僧房を焼いて

蜘蛛宿直噺

【タ】

樽屋おせん（林和作）

田之助色懺悔（林和作）

狸寺の深夜（藤田草之助作）

玉藻前

大名小路

七夕祭

平将門

太平記忠臣講釈

太平記忠臣講釈（岡本綺堂作）

大菩薩峠（星野梅耀・武田杵太郎

形訳）

伊達評定春読切

太平記曦鏡

【チ】

張良兵書賜

忠臣誉高羽

忠孝浪花噺

忠臣蔵年中行事

児稚桜振袖武蔵

忠孝染分纏

千歳曾我源氏礎

蝶花形名歌嶋台

契恋春粟餅

忠臣いろは実記

忠臣誉鉢植

忠臣蔵銘々伝

忠臣蔵年中行事

茶を作る家（松居松葉脚色）

悲劇 蝶子夫人（二宮行雄抄訳）

児ヶ淵（岡本綺堂作）

散楓恋血祭（松居松葉作）

忠臣というもの（松本峯吉作）

千代田刃傷（須藤南翠作）

竹生島（右田寅彦作）

蝶千鳥恵方入船（右田寅彦作）

忠臣冬菜売（右田寅彦作）

中将姫当麻縁起（竹柴金作作）
千坂兵部

【ツ】

罪なき子

梅雨濡浮名鮫鞘

鶴龜寿曾我島台

鶴模様五変化彩

積恋雪閑扉

釣狐尾花褥

摘絞鮮血染野晒

月雪花三組杯觴

罪なき罪

月謡菘江一節（林和脚色）

【テ】

喜歌劇 天国と地獄（小林愛雄脚色）

色）

貞操（松居松葉作）

天満宮愛梅桜松

【ト】

東城銀行（鈴木泉三郎作）
東京行進曲（菊池寛作）

とらはれ（佐藤紅緑作）

法場換子（松居松翁補作）

童話劇 鳥の巣立ち（生田葵作）

隣の花（岸田国士作）

どんつく

トス力（松居松葉記）

唐人塚（岡本綺堂作）

道成寺

鳥羽屋獅子

燈台守（佐藤紅緑作）

お伽劇 虎退治（鈴木泉三郎作）

どんつく

時朗雪浦里

【ナ】

中村七三郎の死

涙橋（山崎紫紅作）

長町女腹切（岡本綺堂脚色）

名和長年（江見水蔭作）
名和長年（右田寅彦脚色）

那智丸

名高吉原百人切

名未代花魁

浪花奇談梅早咲

夏祭浪花鑑

名大島功譽強弓（古河新水作）

盛名楠北国奇談

【ニ】

二月堂（右田寅彦作）

二人椀久（右田寅彦作）

日光陽明門（右田寅彦作）

偽紫田舎源氏（右田寅彦作）

二人袴（福地桜痴作）

日本振袖始（右田寅彦脚色）

人形の心（松居松葉作）

日蓮大士真実伝

日清実戦記

日光宇都宮騒動
人形筆有馬土産

日蓮記

【ネ・ノ】

浄瑠璃 猫と鼠（中内蝶二作）

喜劇 野晒

後の月酒宴嶋台

軒端松

【ハ】

母（鶴見祐輔原作）

舞踊 春近し（園池公功作）

春の流れ

喜劇 鳩のお使ひ（生田葵作）

喜劇 花婿花嫁（江見水蔭作）

花ふぶき

馬鹿野郎の死（川村花菱作）

春調娘七種（伊坂梅雪補作）

喜劇 売国奴

喜劇 伯爵夫人（稲岡奴之助作）

八幡船（游仙子作）

ハムレット

博多二輪加

八笑人

羽衣

花春駒

花吹雪岩倉宗玄

春駒小栗義勇伝

初霞女猿廻

初恋千種濡事

橋弁慶

浜松風恋歌

番町皿屋敷

春遊神楽曲鞠毬

母育雪間鷺

初売八百屋新店

春霞寿曾我

花舞台咲分源氏

艶容女舞衣

花見氣候氏子賑

【ヒ】

一人旅の女（武田正憲作）

笑劇 秘密（佐藤紅緑改訳）

秀吉と曾呂利（武者小路実篤作）

秀吉と淀君（松居松葉作）

緋桜

引越騒ぎ（江見水蔭作）

ひともと芒（右田寅彦作）

天鷲絨の薔薇（小山内薫訳）

彼岸の夕（額田六福作）

光と影の舞踊（矢島勝吾案）

左小刀

比翼紋愛井の字

西洋舞踊 光と色五種（矢島勝吾編）

日高川

肥後駒下駄

左甚五郎

姫小松子日廻遊
彦山権現誓助刀

【フ】

双蝶々曲輪日記
両顔月姿視

二夜月御伽草紙

二つの死（景山哲雄作）

文ひろげ（右田寅彦作）

踏切番の娘（辻村誠之作）

婦人同志会（八幡大名作）

文禄侍気質（右田寅彦作）

喜劇 婦人待合室（松居松葉作）

喜劇 富士登山（江見水蔭作）

喜劇 婦人銃獵家（江見水蔭作）

復讐

武勇誉出世景清

風俗名所合

藤娘

【ハ】

滑稽劇 ベースボール（井出蕉雨作）

新劇 別荘（井出蕉雨作）

別眺重帷子（右田寅彦脚色）

米国革命史

紅家の武士（長田釈濤訳）

平家蟹（岡本綺堂作）

【ホ】

堀部妙海尼（右田寅彦作）

本朝王昭君（小野清子作）

法界坊（田村西男作）

北越戦記

暴風雨

早苗鳥浅間錦絵

北州千年寿

【マ】

真間の手児奈（小寺融吉作）

松平不昧公（右田寅彦作）

魔笛（小林愛雄訳）

万年草（岡本綺堂脚色）
間宮一家

松葉屋瀬川（右田寅彦作）

舞扇名画彩（右田寅彦脚色）

満潮（江見水蔭作）

【ミ】

みだれ金春（大村嘉代子作）

三上山（右田寅彦作）

三浦大助（岡本綺堂作）

水谷高尾（右田寅彦作）

三巴雪夜話（岡本綺堂作）

民謡四種

一中節 あづま道行

宮本左門之助伝

三花菱朝日曠着

【ム】

無智なる者（藤田草之助作）

宗任（右田寅彦作）

謀反人（松居松葉作）

娘五人（佐藤紅緑作）

昔囃花咲爺（水谷竹紫作）

娘天一花園於蝶

娘獅子

往昔織本場八丈

【メ】

邂逅（半井桃水作）

明暗双眼鏡（園池公功作）

明治出世鑑

銘作左小刀

名筆反魂香

名筆傾城鑑

名作倭人形

名譽筆拔大津絵

【モ】

木食上人（田中空雷作）

主水桜実録白糸

桃山太平記

舞奏いろの種時

戻駕色相肩

戻橋

【ヤ】

喜劇 役者ぎらい（松居松葉翻案）

椰子の蔭（宮森麻太郎作）

矢口渡（山崎紫紅作）

谷口延命院（北村包彦作）

鎗踊花段幕（右田寅彦作）

闇（前田河広一郎作）

破れ曆（木川恵二郎作）

鎗持可内

闇の力

大和錦朝日旗揚

奴戻駕（右田寅彦作）

倭仮名在原系図

八雲立湯津妻櫛

弥生の花浅草祭

【ユ】

雪女五枚羽子板（岡本綺堂脚色）

有職鎌倉山

夕だち（大島多慶夫作）

雪の段（古谷久綱・巖谷小波作）

夢殿（右田寅彦作）

雪常盤

由縁色菫紫

【エ】

吉田御殿（弘津千代作）

夜の森（松居松葉訳）

代々木の神風（田中巴雷作）

吉田御殿（小山内薫作）

淀君と五右衛門（松居松葉作）

義経千本桜

四谷怪談

夜明前（中谷徳太郎作）

夜討曾我狩場曙

【フ】

洛北の秋（九条武子作）

蘭奢待新田系図

羅生門腕誉

頼光勲功往昔噺

雷火（岡本綺堂作）

【リ・ル・レ】

両国の秋（岡本綺堂作）

両国巷談（林和作）

龍女伝（山岸荷葉作）

両国一夜話

柳橋夜話（大村嘉代子作）

留守番（武者小路実篤作）

留守宅（田中掬汀作）

霊験（坪内逍遙翻案）

【ロ】

六波羅禿（山岸荷葉作）

社会劇 老後（中村吉蔵作）

お伽劇 ローザ姫（竹中歌吉作）

六歌仙容紛

六歌仙名詠二面影

六歌仙の中 文屋の康秀

【ワ】

若き平家の人々（松居松翁作）

笑へ笑へ（井出蕉雨作）

若きアキレス（秦豊吉訳）

和田の酒盛（松居松葉作）

喜劇 若い妻（佐藤紅緑作）

以上とは別に、 から までの

ファイルに綴じられた、カーボン

謄写の台本がある。

その配列順は不明であり、別に綴じた理由も分からない。この中から、右にない表題を以下に掲げる。右と重複するもの、およびパンフレットを綴じた宝塚少女歌劇の作品は除いた。

日之出（佐藤紅緑作）

比留間仙子

夕涼鴨川風（右田寅彦作）

疑ひ損

世間

小桜絨（井出蕉雨作）

天の網島

お夏清十郎

犬公方（右田寅彦作）

お染久松 蔵前

戦時の花嫁

日蓮上人辻説法

道中膝栗毛

八幡屋の娘（鈴木泉三郎作）

大和橋

南洋風（江見水蔭作）

大塩騒動記

飛行芸妓（松居松葉作）

水掛論（江見水蔭作）

パリアツチ（松居松葉訳）

釈迦と其妻
 侠婦伝

三 柏葉樹頭世風（永井荷風作）

群衆（鈴木泉三郎作）

三、資料紹介 『おもちや店』

以下では、右の台本の中から、近代劇壇史をめぐる資料として興味深いものを、（紙幅の都合もあり短いものを）数点紹介する。

まず、二代目市川猿之助案による『おもちや店』は、大正十一年十月に有楽座において、春秋座第三回公演として上演された、舞踊である。大正八年の三月から九月にかけて欧州旅行を経験した猿之助が、帰朝後に西洋舞踊の技法等を取り入れて上演した舞踊としては、大正十一年十一月明治座での春秋座第二回公演で初演された『新舞踊 虫』が名高いが、それに続く実験的作品である。

舞踊の台本とはいえ、歌詞なし台詞なしというところが当時斬新とされたもので、まさに「案」というほかない内容であるが、従来、内容についての資料の少ない演目でもあり、正式に検閲のための上げ本として提出された台本を紹介する次第である。なお比較のために、早稲田大学演劇博物館に所蔵される、同公演のパンフレット『春秋座 脚本梗概』に掲載された内容紹介を下段に对照させた。

表紙を含めて三丁の袋綴じで、表紙と裏表紙に、「有楽座」「警視廳保安部保安課封印」の印記がある。二丁目の表に検閲済を示す「警視廳ノ大正拾壹年拾月九日ノ検閲済」の印があり、「伊藤」という担当官の印もある。

以下、行移りは原文の通り、丁移りは、その丁の末尾に「1表」（二丁目表の終了）の形で示した。

市川猿之助案

舞踊劇

おもちゃ店

或るおもちゃ店の場（1表）

（1裏白紙）

或るおもちゃ店の場

登場人物

おもちゃの主人

其他

おもちゃの精大ゼイ（2表）

舞台八或る玩具店の店先晶片方に玩具がたくさん
並べてある店の老爺店番をしてある此模様にて

幕あく

トすぐに舞踊様になる

おもちゃの爺又八大変つかれたる有様にて

自分の店のおもちゃを片づける事も

忘れて寐スミつてしまふ

（『春秋座 脚本梗概』より）

おもちゃ店の主人は人形にはたきを掛けながら、つひうとくとまどろんでう。店の人形は得たりかしこし活躍を始める。『首振り』が出て遊んで居る処へ『猫』が出て来る、丁度来合した『美しい』人形は『猫』のために足折られる。それを見た『女』の人形は怒つて『猫』をひどい目に逢はす。『猫』は口惜しさに親分である『魔物』の処へ逃げて来て鱧を附けてその次第を告げ、復讐を頼む。そこで『魔物』は『猿』『犬』『熊』に『魔』を引き具して出かける。折よく魔物は日頃から思ひを寄せて居た『皇女』に出逢ひ先づ之を生擒らんとする。と、急を知つた『王子』は単騎駆けつけて奮闘力戦の結果『魔物』を退治して『皇女』を取返し凱旋する。大将を失つた『猫』『犬』『猿』『熊』『魔』はその葬式を済ませて愈々弔合戦をすることになる。そこに一場の大修羅場が演出される。此うちに夜は明けて、主人は騒ぎに眼をさまし、人形達は忽ちもとの位置に収まる。と云ふおもちゃ店の幻想。

すると今迄おとなしくしてゐた玩具は

急に各自に動き出し戦争こ

つこを初め出す色く々な事があり

ト々老爺さわぎに目をさまし(2裏)

驚めて玩具を掃除すると戦争

も一時に平穩に帰るすといふ処で

幕(3表)

千鶴萬歳(3裏)

四、資料紹介 『劇的バレエ 嫉妬』

帝劇は洋劇部を抱え、講師としてバレエ教師のG・V・ローシーを招いて歌劇の養成につとめている。その歌劇の検閲用上げ本も、『おもちゃ店』と同様の「案」に近いシノプシスであることを紹介しておく。ローシー作による『嫉妬』は、大正四年十月帝国劇場で上演されたものである。これも比較のため、同興行の絵本筋書(演博蔵)にある内容紹介を下段に載せた。

用紙は二十行の罫紙を二つ折りにして袋綴じにしてある。表紙見返しに「警視廳ノ大正 年 月 日ノ一時検閲済」の印記があり、年月日がペンで書き込まれ「大正四年九月廿九日」となっている。担当官の印記は「船茂」。

以下、行移りは原文の通り、丁移りは、その丁の末尾に「1表」(二丁目表の終了)の形で示した。

嫉妬(劇的バレエ)(1表)

(1裏白紙)

第一場

場景シビリアポサダ(酒店)の内部

幕上る賊酒をのむカルメンチタといふ西班牙の

舞踏家現はれ一同酒と水とをさゝける

しかし舞踏家は拒むアルバーシツといふ

闘牛者現はれカルメンチタを見恋を捧

ける彼女はこれを受け入れるカルメンチタは

友情のために踏舞する漁夫(恋敵)

ロドリクエツツ来りカルメンチタを見(2表)

カードを遊びしあげく喧嘩となる

ロドリクエツツ片手を傷くカルメンチタは

闘牛者と共に出て行く恋敵は是れを

追ふ闘牛者を傷くカルメンチタ気が

遠くなる

ロトリクエツツ入り来り彼の競争者が死んだと

思ひカルメンチタを見自分の恋をかなへさせ

ようとすカルメンチタは暗殺者を見て

(帝国劇場絵本筋書より)

『第一場 西班牙居酒屋の場』音楽にて幕開くと、茲は西

班牙、シビリア、ポサダ酒店の内部にして、人相悪き顧

客多勢、酒を飲み、骨牌を弄して居ると、カルメンチタ

と云ふ舞姫出来るにより、一同は是に酒を勧め、我勝ち

に其愛を得んと競ふ、されどカルメンチタは一々其等の

申出を断る、アルベレッツツといふ闘牛家亦来り、カル

メンチタを見て心を動し、満身の愛を捧げると、カルメ

ンチタも亦憎からず思ひて、其愛を受け、共に手を取つ

て舞ふ、カルメンチタが昔の情夫にして漁師なる悪漢の

ロドリクエツツ来り、此体を見て嫉妬を起し、アルベ

レッツツを骨牌遊の仲間に入れ、喧嘩となり、其際ロド

リクエツツは片手に負傷をなし、カルメンチタはアルベ

レッツツと共に出行く、ロトリクエツツ追ひ行きアルベ

レッツツ重傷を負はず、カルメンチタは昏倒す、ロトリクエ

ツツはアルベレッツツ既に死したるものと思ひ、カルメン

チタに迫りて其恋を遂げんとすれば、カルメンチタ是に

恋の仇を復し、恋人を助けんとして、戸外に出づるを、

ロドリクエツツ追継り、カルメンチタを傷く、人々は急

これを射自分の恋人を助けやうと戸外

出るロドリクエツ支へ彼女を傷ける（1裏）

戸外の騒ぎがきこへる

漁夫は打つ音をきく身を全うしよう

と窓から出る シ^{ママ} 来り人殺を見

カルメンチタは窓を指し彼を殺す

第2場

六ヶ月后シビリアの祭の日カルメンチタ

とカルバレーフの結婚の日

カルメンチタ ミセス・ローシー

カルバレーフ ミスター・ローシー（2表）

ロトリゲエツ 松本幸四郎

外洋劇部全部（2裏）

五、資料紹介 『五代目市川三升襲名披露口上』

続いて紹介するのは、口上の台本二点である。

早稲田大学演劇博物館に所蔵される六代目尾上菊五郎関係の書抜に、やはり「口上」のものがあるのを知るが、台本として全員的口上が残る例は、少なくとも大正期については未見である。口上の全体と、それに伴う俳優間の関係

を警官に告げ、警官来り、カルメンよりロドリクエツツの行方を聞き、忽ちにに彼を射殺す。

『第二場、シビリアの街上』是より六ヶ月程経、シビリアの祭の日、カルメンチタはアルベレッツと目出度く結婚し、茲に人々の祝賀を受くる模様にて賑に幕

がうかがわれる資料といえよう。

五代目市川三升襲名披露口上は、大正六年十一月帝国劇場での、九代目團十郎追善興行におけるものである。女方を本領としながらも座頭である六代目尾上梅幸の発声に始まり、七代目松本幸四郎、七代目沢村宗十郎、初代沢村宗之助、堀越福三郎改め五代目市川三升、五代目市川新之助、堀越喜久栄（のちの三代目市川翠扇）が、順に口上を述べている。襲名の当人が発言するのは昭和後期に始まったことであるような言説もなされるが、すでに三升本人が発言していることも分かる。当今とも違つ独特の口上口調が興味深い。

帝国劇場の劇場外観写真が入った事務用箋十枚を使って、毛筆で記されている。それぞれの頁移りは、終末部に「（１）」（一枚目の終わり）の形で示した。漢字を通行の字体に改めた他は、すべて原本の通りである。

口上

梅幸

一座高う八御座りますれど、御免蒙り口上申上げます、当劇場御鼻肩とあつて興行の度毎いつもく大人大整員、株主重役八元より従事員一統、数ならぬ私共に至ります迄、難有厚く御礼を申上げますやうに御座ります。

借又此度八故九代目市川團十郎追善と御座りまして、聊か故人の倂を偲びまする為、未熟なる技芸を御高覧に供しまするやうな次第に御座ります。

今更私共が申上げます迄も御座りませねど故人八明治梨園界が生みましたる一大巨人に御座りまして、当時の学者有識の人々と語り我国粹とも申すべき歌舞伎劇の保（１）存二努め、其存生中八元より、当人没後も益々隆盛を極め、今日海外迄も、我歌舞伎劇の名譽を挙ぐるに至りましたる八故人の人格技芸努力等大二預つて力ある事と存じますや

うに御座ります。

光陰八矢の如しとか申しまして、歳月の経るの八誠に早いもので、故人が没しまして既に十有余年に御座ります。亡父五代目菊五郎と八親戚の關係二御座りまして、舞台の上のみならず、日頃の交際も、兄弟同様、親み交はしたる間柄故、私共にとりまして八、師とも親とも思はれ、五代目菊五郎没後私共兄弟改名の砌りにも、故人八私共の爲めに情をこめたる披露の口上を、申呉れましたるやうな訳にて、それやこれや(2)を思出しますれば、未だ昨日今日の如く、今更ながら追懐の涙にくれますやうな次第に御座ります。

是に列りまする八故人が遺れかたみ実子富貴子兩人の婿、福三郎改め三升並三新之助、其娘喜久江にに御座ります。三升新之助共、既に舞台の人となり、専心芸道修業中にて、未だ若年未熟二八御座りますれど、志八中々堅固に御座りますれば、次第く^くに技芸も熟達いたす事と存じますやうに御座ります。従ひまして、皆様方にも足ら八ぬ所八充分御叱り下されまして、市川の流益々清く尽きせぬやう、御鼻眞御引立の程一重にお願ひ申上げますやうに御座ります。

幸四郎(3)

儲私事八幼少より故人の門弟となり、親しく薰陶を受けましたる一人に御座りまして、申さば此親柱の御蔭にて人となり、漸く今日独歩きたすやうになりましたる者に御座りまして常々故人に八心から推腹いたし居りまするが、既に梅幸も申上げましたる通りにて、只今それを繰返しまして八、徒らに重複いたしますばかり故茲二八省略いたしました、只管御願いたしまする八、何卒故人に対する御誼みを是なる三升、新之助兩人の上に御掛け下さりまして、一人の御鼻眞御引立を御願ひいたしまするやうな次第に御座ります。殊二三升儀八従来福三郎を名乗り居りましたるが、今回の追善を機といたしまして、故人の俳名三升を襲名いたし、其御披を兼ねて新之助(4)富貴子を引連れ当座迄旋せ参じましたる次第同人等将来の出吉八一重二何れも様の御引立如何に依る事二御座りますれば何卒嚮向長く

御目掛けられ御力添の程を御願いたしまするやうに御座ります。

分けて申上げまする八勸進帳の儀二御座りまする。只今迄何回相勤めましたるや、当劇場に於てすら再三御目通りに供し既に今春一月の舞台上に上場いたしましたるばかりに御座りまするべ、御客様にもさぞ御迷惑と、幾度か辞退いたしましたるなれど、此勸進帳八故人の最も心を入れ、且つ得意といたしましたるもの團十郎の勸進帳か勸進帳の團十郎かと申す位にて追善に八なくて叶八ぬもの故、是非とも相勤めまするやう、四方御客様（5）方強ての御勧めもだしがたく、殊に富樫に八梅幸、義経二八宗十郎出演いたし今春と八聊か御目先きも変りまする事故御言葉二廿へ出演いたしまするやうな次第に御座りまする

何卒又かと御叱りなく旧きうちより新らしきを汲み御見物の程一重に御願ひいたしまするやうに御座りまする。

宗十郎

只今梅幸幸四郎の申上げましたる通り、故人八明治俳優中殊に勝れたる名人二御座りまして、其流れを汲む一門も数多く、私共迄聊か親類関係の筋合二御座りまするが、今日此追善の席に列しまする事八殊二名譽の次第に存じまするやうに御座りまする。就きまして此追善劇二御座りまするが（6）此際却てお祭騒ぎ八遠慮いたし、神妙二故人を追慕し、其妙技の跡を尋ねる方、寧ろ追善の本意にも叶ひまするやう心得、当劇場専属の俳優のみにて演じまするやうな儀二御座りまする。尚一際、の刺売を前約いたしまして、其上り高の幾部分を去月水害の砌り、不慮の災難に遭遇し不自由致され居る人々の慰問の資に供し度と存じ居りまするやがて是れ故人追善の意に叶ひまするかと考へまするやうに御座りまする。

宗之助

只今宗十郎の申上げましたる様二ござりまするべ例へ表掛り八質素に俳優八小勢に御座りまして、其志と意氣組（7）八聊か譲る所なく却て、氣を合せ、舞台上に勉強いたしまするべ何卒御最願に於きまして、日頃のおよ

しみと御座りまして賑々しく御来觀連日満員打続けまするやう勝手がましよう八御座りますれど御願ひいたしまするやうに御座ります。

福三郎

私事八福三郎改め三升二御座ります。只今梅幸初め一同の申上げましたる通り此度八亡父九代目團十郎の追善と御座りまして御臈眞様の厚い御力添を蒙り初日早々（初日以来）斯く賑々しく御来觀下され難有厚く御礼を申上げまするやうに御座ります。家内一統八勿論の事、故人もさぞ地下に於て感泣いたし居ります事と存じます（8）。

新之助

私共兩人此恩儀二報ひまする為め、又二ツに八斯く迄御賞賛下さる亡父團十郎の名を耻しめぬ為、層一層芸道勉強いたしまするれバ皆様方にも尚此上とも御臈眞の上御引立の程を一重に御願申上げます。尚是れなる喜久栄八私娘に御座りまするが故人が唯一の血統と御座りまして強て当座の御勧めにより烏滸がましくも御目通りに控へさせました何卒御見知り下されまするやう御願ひ申上げます。

喜久栄

宜しうお願ひ致し升る。

梅幸

偕て故人の事に關しまして申上げ度事数限りも御座りませねど、此上御静聴を煩すも恐れあり（9）まするれバ只一言此追善興行の成功いたしまするやう隅から隅迄ズーイと希上げ奉ります。（10）

六、資料紹介 『七代目尾上栄三郎襲名披露口上』

七代目尾上栄三郎襲名披露口上は、歌舞伎座専属の十五代目市村羽左衛門、市村座専属の六代目尾上菊五郎を迎えた、大正九年六月帝国劇場におけるものである。これも座頭の六代目尾上梅幸に始まり、七代目松本幸四郎、六代目尾上菊五郎、弟の六代目坂東彦三郎、十五代目市村羽左衛門、再び七代目松本幸四郎、七代目沢村宗十郎、初代沢村宗之助、十三代目守田勘弥、四代目沢村長十郎、四代目尾上松助、二代目尾上幸蔵が、順に口上を述べる。ここでは栄三郎本人は控えているのみのようである。栄三郎は、このうち大正十五年五月七日に、二十七歳を以て病没する。帝劇専属の俳優を主とした三升襲名と異なり、他座から迎えた大看板と帝劇諸優とのバランスが、劇壇の相関図を自ずと物語って興味深い。

六丁の袋綴じに毛筆で記されている。丁移りは、その丁の末尾に「1表」（一丁目表の終了）の形で示した。用箋は「平山用箋」とあるので、竹柴晋吉（平山晋吉）の手になるものと思われる。句読点がないので、通読の便のために適宜空白を設けた。また、貼り紙による大きな訂正が三箇所あり、貼り紙の部分を【 】で示した。羽左衛門の発言は、やや短すぎたところへ愛嬌の文言を付け加えたもの、逆に松助と幸蔵の訂正は、長すぎることを切り縮め、終末部の訂正は、「隅から隅までズイと」に至る部分での各俳優の顔の立て方が分かる。

口上（1表）

（1裏白紙）

本舞台は金襴の道具にて鍛帳スマを巻上る

ト頭取いで、俳優を一々呼び出し席に着かせて

梅幸 一座高うは御座りまするが口上を申上奉ります 借、梅も実に入る季節にもかゝりませず何れも様には益々御機嫌克いらせられ恐悦至極にぞんじ奉ります 随而当興行は市村羽左衛門出勤仕りますれば取分て狂言を選び御覧に供し奉ります 何卒御光臨の程伏て希願上奉ります 序ついでながらと申して八失礼にござりまするが尚一言このお席をお借り申しまして御聞き取おきを願ひたうぞんじます、就いて八高麗屋さん倅丑之助の御披露を願ひます

幸四郎 畏りました 借皆様 今度尾上丑之助 栄三郎と改名仕り名題に昇進いたしますやうにござります サア六代(2表)目さん私が口開きをいたしましたから宗家のあなたから口上を述べて下さい

菊五郎 ハイ夫では私が申上ませう 予て御客様も御承知の如く私が前名を継ぎました丑之助は本年が徴兵適齡で人言人前に相成りましたものでござります 夫故御鼻肩下さる御客様より名題にせよ改名させよと種々のお勧めをうけ未だ修業中にはござりますれど名題に昇進いたし兄の梅幸がその以前栄三郎と申し居りましたを中程彦三郎が継ぎましたが此度丑之助を栄三郎と改めましてござります 此上は尾上の松のとこしなへに大なる樹みきと相成まするやう重扇の末広く御力添を偏に願上奉ります

彦三郎 私の前名栄三郎を襲名いたし呉れました丑之助は七代目(2裏)栄三郎に相成まする 私と違まちひ真まことに内気な性分でござりまして其癖芸道には熱心でござります 夫故一を聞いて十を知る位に、イヤこれは聊か鼻肩目かも知れませんが、何事によらず精神を籠めて勤めましたならゆく／＼は立派な俳優ともならませうかとぞんじますれば御目かけられ御手引なし下さりまするやう願はしうぞんじまする

羽左衛門【私は当劇場へ昨年六月まいりまして又今年の六月に養子に参りました 女優の居る劇場でござりますから嫁せんぐ詮せん索をいたすのでござりますがイヤハヤ男優の時ばかりの出勤でよい嫁を見だすことができず いつもいつも不本意にぞんじをります】梅幸から丑之助の名題昇進並に改名の儀につき相談に預りましたその際 親の目

には丑之助が子供のやうに見えるであらうが私の見た所ではもう吾人前になつてゐる このままにしておいたなら本人の励みにもなるまいから皆様の仰せに従つたらよからうと勧めまして いよく此たびの運びに相成ました次第にござります（3表）

幸四郎 先程も申上しましたが丑之助さんのお目出度お話を伺ひました時どのやうに悦びましたか知れませんが、実は若い俳優さんが名題におなりなさるのに修業中だと仰しやつて出世をさせて下さらなかつた 夫故私はどこやらものたらぬやうに思つて居りましたが然るに此度お許しをえて今日のお弘めはどのやうに悦ばしいか知れませぬ 此上は舞台に立ちて一生懸命の御勉強を祈り居ります

宗十郎 私は当春二人の倅を名題にいたしましたから丑之助さんが名題になるときいて嬉しく思ひました 夫から直に寺嶋さんへ参りました時 私の家には種々の名前があるが矢張御自分の附けてゐた栄三郎を継せると伺ひました 一つ名が此様に代々続いて行くといふのは誠に目出度ことと思ひます これこそ尾上（3裏）家一家一門千代と栄えるしかとぞんじお悦びを申上する

宗之助 このお祝ひを伺ひました時私は斯う思ひました 顧みれば帝国劇場開場の際の丑之助さんはまだ子役でありましたが十年の星霜を経て先頃紀年興行の御祝賀があり引続てのお目出度は一座にとりて此上もない面目と悦びを重ねてお礼申上する

勘弥 斯様に目出度ことが続きまして親しみのある睦まじい中へ私に加はらせていただきましたのは名聞と申す外はござりませぬ 併し私も口上を申し上げねばなりません夫ではあまり鳴瀬がましうぞんじますれば栄三郎改名名題昇進の御祝儀申し述べますやうにござります

長十郎 私は今日この御披露の席に列なりお悦びを申すのでござりま（4表）するが先輩の方々から十分に述べて下さいましたから何も申上ることはござりません お友達の栄三郎さんともどもに此の道に尽す心得にござり

ます

松助 又私は長生の徳があらはれまして目出度ことが重なつて参ります この丑之助の父が栄三郎で名題になりました時も又梅幸を襲名の際六代目菊五郎坂東彦三郎の改名にも口上に連なり又丑之助が栄三郎と相成ました今日の御披露に加はりまするは弟子冥利につきた果報者でございます イヤこれは私のことのみを申し誠に恐入りました 夫につき尾上家門第一同此席へ連なりまする筈でございますが何分にも大勢のこととて私と幸蔵が代理として一言申上るやうにござります

幸蔵 何分にも年若き栄三郎芸道未熟にござりますれば(4裏)悪しき所は幾重にもア、セイ、コウセイ、と御差図を願ひ御引立なし下さりまするやう門第一同に代り宜敷御願申上奉りまする

【松助 又私は長生の徳でござりまするか襲名披露の際には急度その席に連りまする 又此度も尾上家門第一同に代り私と幸蔵が此席へ並びましたやうにござります

幸蔵 何分にも年若き栄三郎儀にござりますれば幾重にも御差図を願ひ御取立なし下さりまするやう門第一同に代り御願申上奉りまする】

幸四郎 借栄三郎さんにつきまして八銘々より御願ひ申上ましてござりまするが尚よき折柄とぞんじますれば、寺嶋さんあなたから国松改名猿蔵の口上をお願申ます

梅幸 デハお詞にあまへまして申上ませう 国松改名猿蔵の口上を申上ます これは九代目團十郎と因みも深き故市川猿蔵の倅でござりまして父の死後幸四郎が預り世話をいたし居りましたが此度名題に昇進改名は仕りましたなれどこれとても未だ修業中の者にござりますれば此上共よき俳優に相成まするやう御見捨なく御取立なし下さりまするやう願上奉りまする(5表)

羽左衛門 斯く一座の者を見ますると知らぬ昔が惚ばれてなりませぬ 先私の市村 勘弥の守田は太夫元の家柄でこ

ざりましてここに並び居ります者皆古き家筋でござります 斯様に名門が揃ましたは稀に見られぬことぞ
んじまする

宗十郎 このお目出度中で又も目出度御披露をなされた栄三郎さんは如何なる月日の下に生れた幸運のお人であるか
子を持つ親の私は羨しう思はれます 此上は益々御出精なされて御上達が肝要かとぞんじます

菊五郎 此商売ばかりは一生涯古でござりまして目上の人の教へをうけ芸を磨くより外はござりませぬ 私も影なが
ら力を添へ注意を加へますればゆくは一トかどの俳優とも相成りまするやう御鼻（5裏）眞御引立の程偏
に願上奉りまする

梅幸 此上は祖父五代目菊五郎の御余光を持つて御愛顧を賜り度 幾重にも幾重にも折入つて隅から隅まで

羽左衛門・梅幸・幸四郎・菊五郎 ズイト

皆々 希願上奉りまする（6表）

【梅幸 重ねて御願いたし升るは五代目菊五郎の御余光をもつて未熟なる栄三郎此上は皆様の御情にて行くは立
派なる俳優となれ升るやう御引立の程

幸四郎 隅から隅までズイト

菊五郎 希願

皆々 上奉り升る】

（6裏白紙）

（補記）紹介をなすにあたっては、そもそも映画文化協会の存在をご教示いただいた古井戸秀夫氏、資料閲覧にあ
たって様々な便宜をお取りはからい下された映画文化協会の、油野雅龍氏、石川敏治氏、永田智子氏のお世話に
なりました。厚く御礼を申し上げます。

【 Summary 】

The note on Kabuki Scripts in the collection of
EIGA-BUNKA-KYOKAI (1)

KODAMA Ryuichi

Department of Performing Arts in National Research Institute of Cultural Properties, Tokyo carries out the research on Kabuki scripts in modern age.

As a part of its outcomes, this note would like to show here some of the Kabuki scripts which belong to the collection of *EIGA-BUNKA-KYOKAI*.

EIGA-BUNKA-KYOKAI keeps the scripts that related to the Imperial Theater from 1910 till 1930s and those which were referred by its literary section.

The collection includes various kinds of works, such as valuable manuscripts from Edo Period and the scripts of the modern drama.

As the first part of the introduction, we listed the titles of the scripts in collection of *EIGA-BUNKA-KYOKAI*, and selected rare pieces from dance performance, operas and the statements of the actor's.